



連歌心付之事
連歌髓秘傳集

伊地知文庫
文庫20
160



伊地知氏書冊



そし發可れ大夏るこころんそん名留り
身外の物方の事いふはも十三世切字
ふし外ふすらんは傳教を著し人の
いふと申す様ふとくし脇の白紙
發可小疑ふ甲しは事いふはて分
の傳はきんははるはるのうらま

てあつし剛がとくさしあつしあつし
右の句はあつしあつしあつしあつし
吹藤枝外花青梅夏草秋風朝
露夕露夕枯松月夕夕の松の
但千了のの時作と書景のせん
剛がとくさしあつしあつしあつし

外剛の句はあつしあつしあつし

一若くは時鳥の句はあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつし

なほ〜
本〜

〜

〜

〜

待〜

是ハ散〜

〜

〜

〜

〜

花〜

かた上り此田の事一てハ千人一
子細くも連歎と齊しし大や
けりあはれ華と人ハ即ちと云
レ平の白しる一者もまじ果の捨
るも心細くも悲本は心造
る月くまはれはあはれと云

月くまはれはあはれと云
けりあはれ華と人ハ即ちと云
レ平の白しる一者もまじ果の捨
るも心細くも悲本は心造
る月くまはれはあはれと云
けりあはれ華と人ハ即ちと云
レ平の白しる一者もまじ果の捨
るも心細くも悲本は心造
る月くまはれはあはれと云

ふりてあまの国

しるしをあらわすにけりて明なる

是中しるしをいふに思ひて心算するに

北のつらき味をいふに云ふん

つらき一字をいふに

徳をいふに

可有のつらき味をいふに

つらき味をいふに

つらき味をいふに

つらき味をいふに

つらき味をいふに

つらき味をいふに

Handwritten text in Arabic script, consisting of six lines. The script is cursive and appears to be a form of Maghrebi or Ottoman Turkish script. The text is written on aged, yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of six lines. The script is cursive and appears to be a form of Maghrebi or Ottoman Turkish script. The text is written on aged, yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

浦のこゝに 泊つたはきくしるもの
あつたは 浦の旅人 ちよと
いふこと

いふことの 浦のこゝに 泊つたは
あつたは 浦の旅人 ちよと
いふこと

いふことの 浦のこゝに 泊つたは
あつたは 浦の旅人 ちよと
いふこと

上 自 然 之 理 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

木 石 之 性 也 猶 火 之 在 於 上 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

一 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也 夫 理 之 在 於 心 也 猶 水 之 在 於 下 也

あはれ何や秋なる外は宿り
野のこゝろに月をよみ
一宵あはれなる月をよみ

月夜をよみしは
月夜をよみしは
月夜をよみしは
月夜をよみしは

春の夜は月をよみしは

春の夜は月をよみしは

春の夜は月をよみしは

月夜をよみしは
月夜をよみしは
月夜をよみしは

一 花のついでに

しるし

花のついでに

しるし

花のついでに

しるし

一 花のついでに

しるし

しるし

一 花のついでに

しるし

花のついでに

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

花のうららかに咲きし春

様々川も相傳せしむる計以て
諭ししるすに依りて一り耳に
はとする方より三り用ひて
と一り一り腹を任してそ
しるす耳にそりて一り曲折
しるすに依りてそりて一り

又三り一り一り一り一り
り一り一り一り一り一り
り一り一り一り一り一り
相傳せしむる計以て一り
と一り一り一り一り一り
秋夕の月を前にして

一景物のふたふた

大なる

のまはりの

一景物のふたふた

大なる

のまはりの

一景物のふたふた

大なる

のまはりの

のまはりの

のまはりの

のまはりの

一 雲し文光の輝しなむくくは
但しなし命とすは本せり
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは

一 連歌小句は河のささるる
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは
しはなはなはなはなはなは

月夜の影はさかたに山と云ふこと
見ぬわづらふもえさうさうと
中かゆいことさうさうと
一詩をみよと云ふ事
と白くさうさうと
一らんさうさうと

月夜
何れ月夜もさうさうと
是れ初鳥の心
さうさうと
是れ人さうさうと

村のつらきなり今小全なるものし今に
又異行をせしてにをむとふとあせり
いころころ

一上はのびるるは作と二条ある
ちりせがしきとつくと初らさ
ふらとくしり今と作し

白と作は極ふ白作し心も各別也兼
句小まきくにほくまきし上もはら
今を捨て心よりねたるがたにおつる
合言もくし又能くのでにをむにら
がたにおつるが合言はれむと作
くくくくくくくくくくくくくく

一 藤下舟の白は時とまっくれく
り引とし

一 是秋小舟の妻平舟事是入の
秘者し秘とくめ均しし才一は
藤下の綱才二は藤下のておをん
才三はくんりかてしは那也者

一 藤下のてにさくりかまは藤下の
うけり

一 藤下のてにさくりかまは藤下の
白くは我けらるの白紙のーらに云
けては秋一舟小舟を極しつ付をれ
く小舟の藤下の白を

句の脚しんし 又小入句一
句教しのおも世は八字と世
しし之有程を世いふ句は
ばねとけふとく均しとや
来小あらん人をよみたるは
わー

一 出飲の結集して下とたの口端にそと
云ふ小けの根あし

風をさる花をさる
し里河舞小舞し人かこ
入る所川入るける根あし
舞けとあやさ町白ん

我々といふに少くもかゝるものこそ

一 そのとらふに小けり根 その社名も

月日等して以てまゝ

衡 かくては午一に始りるもの

又その河に對して竹根の事

はるかにいふに竹根の事

うゑにまをせし河にうゑにうゑに

一 小けり根の事

余にるるまは又もの事

廿四日にして月日等して

一 そのとらふに小けり根の事

はるかにいふに竹根の事

子... 子... 子...
出款題腦錄傳集 千金莫傳

宗祇耳判

相傳

元管耳判

有任身

白詔

福者見身

絕矣

紹俊

抑此髓腦秘傳集之事 宗祇公攝易
住吉三七日參籠有眩十七八歲計
之童男童女現夢中此道論事任之
八十計之翁夢中出教給也 祇公為聽
書此一卷書留年其時夢想

佛夢想

信之

奇里

雪町

右此一札由佛所呈言認致進上

夕屏筆不但意欲柔落字愆可有

佛座佛恥敷致存依正賢

慶安冬曆寅小春中九月書之園本氏貞

目吉氏正里先生

札下

連歎心付之筆

一 子越らと子句わ片最乃夢小
かほむた色消え 元心まひのほし
やうね初乃きまのほし
以の香那軍し常心身之概更
肝あし主がし

一 花とふ句片夢此櫻のよき香ハ
しね人よのま 主 激流乃のほし
落木のきまの白河の奥
そらら 肝の心付
一 蓮生と子句小 麦ら乃夢乃夢
夢れ来るの心付の筆

浮ら最とくす。子向丸傘打
又、そをわらわ分今、よの竹、まふ
ふらまかひし、け、け、

一、夏守少多と、云、白小、教、世、
の、竹、行、し、に、さ、の、竹、か、
ま、は、言、采、る、山、野、行、し、た、守

の、通、ら、ま、竹、池、ま、浮、れ、し、り、時、者、し
一、海、一、ま、う、了、ふ、京、法、の、し、と、極、の、人
毎、ふ、け、し、り、竹、甲、し、さ、丸、奥、山
道、を、く、令、ふ、法、竹、こ、り、た、に、白
あ、ま、ま、の、し、竹、少、あ、り、わ、く、又、
初、月、一、度、さ、り、り、別

一 西の秋とてふ句小桐柳の葉は
同句とてし初秋の音はく又秋は
吹くやと来りてらん家とてくや
はのよはひの行はれ
一 守の花とてふ句秋の音は
是も初とてし初秋の音はく

けんはく
うをれはく
の行離とてし秋の音は
はと出た声はくはくはく
はあわわはくはく
一 秋夜とてふ句初秋の音は

一 集城有 心 一 心 一 心 一 心
人 和 出 之 心 一 心 一 心 一 心
一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心

一 心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心
心 一 心 一 心 一 心 一 心 一 心

一 母以流の流しるるもくさるる

人等もまぢく所人毎ふ

けりけりけりけり自れは夏

さるる流しるるまぢくまぢく

又まぢくのけりけりけりけり

きりけりのけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけり

一 松尾長吉 漸くまぢくまぢく

けりけり人毎に流し流し流し

けりけりけりけりけりけり

流し流し流し流し流し流し

の里門をのこす
行の指をわすれ
一帯の暮しを
この世の
月と星と
けし

一帯の暮しを
人毎に
松の
心
行

文昭、子二月廿九日 宗祇刻

^中天正、九月霜月、首字之、湯山、在物

筆者上經國、任德、智、云

慶長、冬、也、小春、有、此、百、字、之、者、也



